しずおか発
男女共同参画の今を知る情報誌

ねっとわぁく

2024/3/15　Vol.81

のびしろ

その手で拡げる可能性

目次

❶ あざれあ開館 30 周年 上野千鶴子さん記念講演会
「ジェンダー平等の未来のためにあなたにできること」

❹ やりたいことは やってみよう
～だっこしていても　年を重ねても～

❼ シュフ（主夫）のワーク・ライフ・バランス
～我が家の選択～

❾ 創業者支援から考える
「こうするべき」から「これもアリ」へ

⓫ パソコンスキルと再就職
～取り残された世代の女性たちへ～

⓮ トップの推進力と身近なロールモデルで実現する働き方改革
～丸尾興商株式会社の取り組み～

⓯ 教えて つるたまさん！
緊急避妊薬をめぐる性教育の課題

⓱ 令和６年度「ねっとわぁく」編集員募集

周年記念講演会

の未来のためにできること

周年を迎え、10月28日（土）、あざれあ6階大ホールにて記念の
ンズ・アクション・ネットワーク（WAN）理事長の上野千鶴子さん。
ちや、その後各地のセンターが統廃合や縮小されている現状を語り、
民のみなさんで守っていってくださいね」と呼びかけました。

後藤さくら撮影

上野千鶴子（うえのちづこ）さん

社会学者・東京大学名誉教授・認定NPO法人ウィメンズ・アクション・ネットワーク（WAN）理事長
京都大学大学院社会学博士課程修了 社会学博士
専門は女性学、ジェンダー研究。高齢者の介護とケアも研究テーマとしている。『おひとりさまの老後』『ケアの社会学』『女ぎらい　ニッポンのミソジニー』など著書多数。近刊に『女の子はどう生きるか、教えて！上野先生』『在宅ひとり死のススメ』『フェミニズムがひらいた道』『上野千鶴子がもっと文学を社会学する』『100分de名著「フェミニズム」』最新刊に『「おひとりさまの老後」が危ない！』

フェミニズムが変えてきたこと

日本でウーマン・リブが起こって50年。これまでの日本のフェミニズムを語る上で、社会の変化を感じた出来事として上野さんは、２０１７年に世界中で起こった「＃ＭｅＴｏｏ運動」で日本の若い女性たちも声を上げたことなどに触れました。

「変わったのは若い女性だけではありません。セクハラが当たり前だった時代、セクハラは『職場の潤滑油』という言われ方で正当化されていました。しかし近年、『もし私たちの世代がちゃんと声を上げていれば、社会も少しは変わっていたかもしれない』という発言をする年長の女性も出てきました。私はこの発言を聞いて、社会の空気が変わってきたなと感じました」

フェミニズムが変えられなかったこと

社会は時代とともに自然に変わってきたのではなく、変えてきた人たちがいます。その人たちは、ときに世間からバッシングを受けながらも、顔と名前を出して声をあげ続けてきました。その中で変えられなかったこととして、上野さんは、労働と経済に切り込めなかったこと、選択的夫婦別姓や、同一労働・同一賃金、税制、社会保障制度、国会議員のクオータ制などを挙げました。そしてその理由について「やはり物事を決める場に女性がいないからです」と言明し、さらに「女性議員を増やそうと、さまざまな支援団体も出てきています。静岡県の女性議員の割合はどうですか」と問いかけました。

どんな社会を次世代に手渡せるか

「フェミニズムが変えてきたこと、変えられなかったことはたくさんありますが、上の世代の女性たちが我慢して飲み込んできたことは、そのまま次の世代にも引き継がれてしまいます。状況を変えようとせず、甘んじて受け入れること、被害者で居続けるということは、次の世代の誰かにとって加害者になってしまう側面があると言えます」

社会を変えるために私たちができることを、２０２１年に世間を賑わせた「わきまえない女」というワードを使い、上野さんは参加者に訴えました。

「被害者にも、加害者にも、そして傍観者にもならないために、私たちは、まさに『わきまえない女』になる必要があります。なぜなら、そういう女性たちの声が、社会を変えてきたからです。次世代に手渡す社会が、少しでもいいものであるように、『わきまえない女』になりましょう」と。

あざれあ開館 30

ジェンダー平等 あなたに

「静岡県男女共同参画センターあざれあ」は 2023 年で開館 30
講演会が行われました。講師は東京大学名誉教授で、現在はウィメ
登壇した上野さんはまずはじめに、全国の女性センターの成り立
あざれあが 30 周年を迎えることができたことに対し「これからも県

フェミニズムが求めるもの

最後に上野さんは、ジェンダー平等に向け次の言葉で締めくくりました。「どんな強者もいずれ年老いて弱者になるときが来ます。ときに誤解されることがありますが、フェミニズムは、決して女も男のようにふるまいたいとか、弱者が強者になりたいという思想ではありません。フェミニズムとは、弱者が弱者のままで尊重される社会を求める思想です。人はみな、弱者として生まれ、弱者として死んでいきます。安心して弱者になれる社会を作っていくために、必要な思想がフェミニズムです。そしてそれを実現するために必要なのがジェンダー平等なのです」

参加者の感想より

男女雇用機会均等法 1 期世代の私にとって憧れの大先輩。強くてしなやかな言葉に多くの力をいただいた。「今の若い人の多くはジェンダー平等意識を持っている。それを育てたのは上の世代の女たち」。その言葉に、頑張ってきて良かったと、若い世代にたくさんの課題を残してしまった私の罪悪感に光が差しました。最後の質疑応答でも「どんな人も取りこぼさない」と言う上野さんの人柄が感じられ、しびれました。

子育て世代として、女性として、もちろん一市民として、どの立場で聞いても、たくさんの言葉が深く突き刺さりました。「日本には家族と教育のなかに人権がない」。合理的であること、みんなと同じであることを求め、周りの空気を察して行動する傾向にある大人の姿。その中で人権はどれだけ存在するのだろうか。また「こんな世の中に誰がした。次の世代にごめんなさいと言わないように大人の責任を果たしていこう」これは子育て世代として胸が詰まる言葉でした。純粋な子どもたちの前で、これからも私は周りの空気を察して生きていていいのでしょうか。まずは、つい使ってしまう〝仕方ない〟を使わず、自分の意見を考えよう、そう思いました。

今回、記事を書いた編集員の工藤由佳です。大学生の頃、上野さんの著書に出会い、以来ずっとファンでした。まさかこのような形で上野さんに関わることができるなんて夢にも思わず、とても光栄です。

講演での上野さんは、ユーモアたっぷりで笑いを誘いながらも、鋭い考察と指摘で、私はうんうんと頷くばかりでした。特に「生命を産み育て（出産育児）、その死を看取る（介護）労働が、なぜあらゆる労働の下位に置かれるのか」という視点は、本当にそのとおりだと思います。これまで構築されてきた価値観を、社会全体で見直さなければならないと考えさせられました。「社会は時代とともに自然に変わってきたのではない。ときに批判を受けながらも、顔と名前を出して変えてきた人たちがいる」。まさにその先駆者であり、第一人者でもある上野さんの言葉が本当に格好よかったです。

気さくに写真撮影に応じてくださった上野さん

のびしろ

～その手で拡げる可能性～

「静岡県男女共同参画センターあざれあ」は 2023 年で開館から３０周年を迎えた。
女性の自主的・積極的な活動や社会的自立を支援し、男女が共に築き、共に担う社会の実現を目指す拠点として、積極的に学習、情報、調査、研究、相談交流事業を推進してきた。

この３０年で社会はどのように変化しただろうか。

1999 年に男女共同参画基本法が施行され、女性の就労率の上昇、性犯罪の厳罰化、さらには、男性の育休取得推進、性的少数者への関心の高まりなど、生活だけでなく私たちの意識そのものも、確実に変化してきたと言える。

とはいえ、日本のジェンダーギャップ指数が１４６か国中１２５位（２０２３年、世界経済フォーラム調べ）という結果からみても、日本社会の変化は他国にくらべてスローペースであることは明らかだ。しかし、私たちは、たとえゆっくりであっても決してその歩みを止めてはならない。

今号では、育児用品を販売する傍ら、抱っことおんぶの研究を続けるなど独自の道を切り開いてきた女性、シュフ（主夫）となり、家庭における男性の役割を模索しつつも実践する男性、誰もが活躍できる社会を目指し、地方で創業支援をする男性、自らの経験を生かし市民向けパソコン講座で講師を務める女性たちを取り上げる。
変わろう、変えようとしている人たち。また、そのような人に寄り添い、サポートしている人たちだ。

社会はもっと変わっていける。私たちはもっと変えていける。あなたもぜひ、その手を伸ばしてみてほしい。その「のびしろ」は無限大だ。

やりたいことはやってみよう

～だっこしていても　年を重ねても～

園田正世（そのだまさよ）さん

1967年静岡市生まれ。静岡大学を卒業し、コンサルタント会社勤務を経て結婚、出産、専業主婦に。第２子出産後、2000年に「北極しろくま堂」を創業。東京大学大学院学際情報学府博士後期課程で研究を進めながら、「NPO法人だっことおんぶの研究所」の理事長を務め、ベビーウェアリングの大切さを社会に広めている。2023年「こぐまPlace」をオープン。
北極しろくま堂有限会社　https://babywearing.jp/
NPO法人だっことおんぶの研究所　https://babywearing.org/
こぐまPlace　https://koguma.babywearing.jp/

インターネットが今ほど普及していなかった2000年頃。結婚や出産で仕事を辞め、家の中で子どもと向き合っていた母親たちは、子育ての情報を収集するのにもひと苦労。自分のことは二の次で「○○ちゃんのお母さん」という呼び方をされることも多かった。そんな時代に「母としてではなく、自分として生きたい」との思いを持って活動する母親サークルが静岡にあった。そこで私（編集員M）は園田正世さんと出会った。

園田さんは常に興味があることを追求し、「スリング」（※1）など育児用品を販売する「北極しろくま堂有限会社」取締役のほか、NPO法人の理事長や研究者といった顔を持っている。すでに子どもが巣立ってしまった私が第二の人生を考えた時、思い浮かんだのが園田さんのこと。子育て中の人に寄り添いながら、様々な道を切り開いてきた彼女に、「スリング」がもたらしたこれまでの活動、そしてこれからの歩みを、同世代目線で昔のことを思い出しながら聞いてみた。

園田さんが語る スリングとの出会い

１９９８年に出産した第１子には市販品のだっこ紐を使ってみたけれど、私の体に合わなかった。そんな時、アメリカの布製スリングと出会ったの。第２子の育児でこのスリングを使ってみて「肩こり・腕が痛い・だっこしていると自分のことも家のことも何もできない」のすべてが解消、しかも「赤ちゃんがよく寝る！」魔法の布だと思ったね。

当時、私は「かんがるーぐみ」という母親サークルの活動に参加していて、「私の悩みはみんなの悩みだ」とわかっていたから、「みんなもスリングを使えばいいのに」と思った。でもその頃はまだ電話とファックスの時代。自分はたまたま買えたけど、静岡では購入できなかった。だから静岡の人も買えるようにしたくて、２０００年に「北極しろくま堂」を起業。人の手を借りながら個人でアメリカからスリングを輸入、販売したの。

２００２年に「布のおんぶ紐はないですか？」とお客様に言われておんぶ紐の販売もはじめた。ファッ

クスでお客様に絵を送ってもらって、百貨店に行ってその絵をもとに探して出てきたのが、セロファンが黄ばんだ一本紐。その紐のタグに書いてあったメーカーに、布のおんぶ紐を作ってもらおうと電話してみたら「誰も買わないからやめておきなさい」って言われて。でも、問い合わせてくれたお客様や私が買うからって頼み込んで、メーカーに最小単位で作ってもらったの。そしたらあっという間に売れた。

スリングももっと日本人の体に合わせたいと思って、２００４年には特許を申請して完全オリジナルの国内生産にしたんだ。

※１　スリングとは、体に斜めがけした布製の袋を使って赤ちゃんを抱く道具

疑問を抱いて〝研究者〟に

スリングはただ商品を売るだけじゃなくて、使い方とか情報をセットにして売るものだと思ってて。でも起業した時から「なぜスリングだと赤ちゃんはよく寝るのか」っていう疑問があったんだよね。それで、２０１０年に「ＮＰＯ法人だっことおんぶの研究所」を作った。自分自身が研究したかったのと、自分が今持っている知見を伝えて専門家を育てたいという思いがあって。その後、本格的に研究したくて東京大学の大学院に入った。

だっことおんぶの研究所では、「ベビーウェアリング講座」の合計８日間で、だっことおんぶの歴史や、素材、使い方や赤ちゃんの発達について学べる。受講者には助産師、理学療法士、整形外科の先生もいて、逆に私の方が教えてもらっている感じ。講座の卒業生は２００人くらいいて、全国でベビーウェアリング（だっことおんぶ）について実践的に広めてくれているんだよ。

だっこしながら ママもパパも自分のことを

２、30年前は、子どもの世話は母親ひとりでやらなくちゃいけないと思い込んでいたところがあったよね。サークルでも夫に「頼る」「助けてもらう」って言い方をしがちだった。今思えば、「父親も一緒にやって当たり前」という意識がほとんどなかったな。だから、自分のことをするのは平日昼間、夫のいない時間帯。そんな時にスリングがあれば、だっこしながら自分のことだってやりやすかった。

私がスリングを売り始めた頃は、カップルで来店しても「使うのはお母さんだけ」みたいな雰囲気で、お父さんはただついてきていた感じ。それが２０１０年頃からかな、「お父さんにもサイズが合うかな」に変わった。ひとつのスリングを調整してパートナーと共有できるから、今では「使い方を教えてほしい」と自分から言ってくるお父さんがほとんど。

「イクメン」という言葉ができたからかもしれないけど、男性が何の躊躇（ちゅうちょ）もなく子育てに入ってきている感じがするよね。２０１２年頃から広告写真で男性のモデルも使うようになった。「お父さんも普通に使うよね、そういう時代だよね」という感覚で。反響は何にもないよ。それが今の当たり前なんじゃないかな。

今の男の人がスリングを使うってい

スリングの使い方を練習するお父さんの様子に、みんなの笑みがこぼれる

うのは、あの頃の「自分のこともやりたいのに」っていう私たちと同じで、だっこしながらコーヒー飲みたいとかマンガ読みたいとか、洗濯物干したいとか、男性の日常生活にも育児が入ってきている証拠じゃないのかな。

やりたいことをやってみる場所

2023年4月、北極しろくま堂は静岡市の街中からオクシズ平野の古民家に移転。その敷地内に「こぐまPlace」をオープンさせた。

「こぐまPlace」ではいろんなイベントを開催してる。レンタルスペースで利用者自身がイベント企画にチャレンジすることもできるよ。もちろん、ただのんびりしに来てもいい。ここは、やりたいことがわからない、やり方がわからない、そんな人が「ありのままの自分」と出会う場所。子育て世代だけでなく、あらゆる世代への応援がコンセプト。大人になってからでも羽ばたいていいと思ったからね。

子育て中は本当に大変だった。今の妊婦さんで夢のような生活を思い描いている人もいると思うけど、すべてが自分のスケジュール通りにできないじゃん。だから子育てが終わってからでも、やりたかったことをやればいいんだよ。

こぐまPlaceでは編み物とか染色のイベントもやってみたいな。手芸や趣味でも誰かの役に立つかもしれないし。

私は挑戦せずに生きていくのは嫌だから。年をとってもやりたいことをやるんだ、という自分の強い気持ちに出会えることが大切だと思う。みんなのスモールステップをここで応援したい。素敵な景色も応援してくれるよ。

「この景色好きなんだよね」と園田さん

クリスマスカード作りのワークショップ

オクシズの自然の中にある「こぐまPlace」。
「令和５年度　静岡市女子キラッ☆プロジェクト」に認定された。

あとがき

この取材中にちょうどスリングを買いに来たカップルに出会った。お父さんがごく自然にスリングを身に着け、人形を使ってスリングでのだっこの仕方を園田さんから教えてもらっていた。「早く本物の赤ちゃんをだっこしたいな」というお父さんの言葉。私が育児をしていた頃の男性は、家族以外の人の前でそんな気持ちを素直に出せる雰囲気があったかなぁと時代の変化を感じた。

園田さんは多くの人に自分らしい生き方をしてほしいと願っている。園田さんが築き上げたものはこの場所（こぐまPlace）にあるし、新しい可能性も秘めている。子育てを終えてもまだまだやれることはある。「この先何をして生きていきたい？」自分自身に問いかけて、一歩踏み出してみよう。